



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.127

2014.4.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

36

## 「地域に仲間組織をと 長野県考古学会の創立」

下伊那郡売木小中学校での教師としての生活は十分に満喫していた。考古学の面では村内の遺跡踏査や村外での発掘調査には参加できた、が普段私の周囲に考古学を話す相手が居ないのが本当に淋しかった。大学時代は何時でも誰かと気楽に考古学の話が出来た。売木では考古学を分かってくれる人は誰も居ない。大学時代の仲間からの便りもこない。私は仲間から見捨てられたと思い込み、ある夜夢に見て目覚め淋しくて泣いた。それがキッカケで地域の仲間組織について向坂鋼二さんと相談して「地方研究者の悩みとその解決への試案」を『考古学手帖』にのせた。県南端の交通不便な売木では行動面でも思うように動けなかった。36年 木曾郡日義小中学校に転任した。中央西線宮越駅が近く汽車に乗れば松本に行けて樋口昇一さんに会えた。夏休み開田高原柳又遺跡発掘に参加して調査の仲間は公民館に合宿した。夜 樋口さんと枕を並べて種々話した。その一つに県内の考古学仲間呼びかけて県的な集いを作ろうと。そのことを「地域の結びつきを」と題して『考古学研究』に投稿した。11月 二人で県内の研究者に学会組織の呼びかけの葉書を出す。12月 返事をもとに結成について話す。大勢の方々が賛成し近くの仲間を紹介してくれた。これなら結成できると喜び発起人会を持つことにした。37年1月14・15日 松本市浅間温泉に発起人会を持つ。県下の仲間が喜んで集まってくれ、嬉しさや興奮の中で話はとんとん拍子に進んだ。夜の懇親会も話がはずみ時間を忘れて話し込んだ。それだけみんなが待ち望んでいたのです。だから28才という若い私が呼びかけたのにも年令に関係なく賛同してくれたのです。二人が中心になって準備委員会を持ち、5月13日 松本市で創立総会を開き、会場には県内各地の旧石器を持ち寄って展示した。11月11日 富士見町井

戸尻考古館で第一回長野県考古学大会を持った。縄文中期の犬遺跡ということで県外からも参加者があって盛大でした。此の時 武藤雄六さんが竪穴住居址の切り合いと出土土器セットでの型式編年は貝塚での層位編年とは違った新しい捉えであり、しかも完全土器での提示は参加者に驚異で受け止められた。これがキッカケで39年11月諏訪市にて『縄文中期文化シンポジウム』を持った。県考古学会だけでなく県外からも多くの縄文研究者が参加し研究会は多くの意見が飛び交い内容のある会となった。夜 藤森栄一先生の旅館「やまのや」に参加者皆が泊り研究会の興奮が持ち越されあっちこちでグループが出来て話し込んでいた。こうして長野県考古学会は県的にも纏まり、県外からも注目される学会となった。樋口さんは事務局長・私は事務局員で学会活動を支える役員として活動し、私は手刷りガリ版の連絡紙を桐原健さんと交代で発行した。このように順調に発足したかのように見える学会も、既に県内の地域研究者の会である『信濃史学会』との関係で会長の一志茂樹先生の意向があつて発足前に樋口さんが話し合いを持って来て無事発足できた。こうした対外的な交渉は全て樋口さんが対応してくれ、私はただ声をかけたただけでした。考えてみると県考古学会は樋口さんが居なければ創立出来なかったと思う。本当に良い友達を持ったな、運に恵まれていたなと思う。

当時 県下の多くの仲間がとにかく集まって話したい、名前は知っていても顔見知りでない仲間たち、お互いに知り合って交流を深めたいという思いがみんなに強かった。私もこれをキッカケに全県的に、年令に関係なく考古学という共通の学問で結ばれた仲間が出来て、県教育委員会埋文担当指導主事になり県下の分布調査を進めたとき各地の仲間たちの協力で調査できた。

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

## 目次

■田舎考古学人回想誌	地域に仲間組織をと長野県考古学会の創立 神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第120回) 臼居直之 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第15回) 石井則孝 …2	■考古学者の書棚	「中世都市から城下町へ」 …4

## 考古学の履歴書

## 公務員としての考古学研究者(第15回)

石井 則孝

## 《わが友・わが趣味 一その4一》

## はじめに

バルカン半島上陸後については、昭和38年(1963)秋の『早稲田学報』に「バルカン半島探査記」として報告してあるので省略する。日本への帰国に際して、旅費がなく残ったのがスバルサンバー、大陸は陸続き、何とかマレー半島のシンガポールまで辿りつけるのではないかと。ガソリン程度は持っていたので、土田純二さんと二人で38年10月末ベオグラードを出発した。土田さんは無免許、色々な事件に遭遇しながらインドのカルカッタまで辿りついたが、それから先は道が無い。無銭旅行の軽自動車サンバーによる大旅行はカルカッタで終了した。この記録は、『陽気な無宿旅行』東都書房で刊行され、ベストセラーになり、新聞やラジオでももてはやされた。若い人に是非読んでいただきたい。

## 1. わが趣味

趣味とは広辞苑によると①感興をさそう状態、おもむき・あじわい。②ものごとのあじわいを感じとる力、美的な感覚のもち方、このみ。③専門家としてでなく、楽しみとする事柄。と記されている。本当の自分の趣味は何だろうかと考えたのは今回が初めてである。読書・音楽・美術鑑賞・美術品の収集、喰べること、酒を飲むこと、将棋・碁・マージャンに興ずること、馬券買い等々広くこの年までやってきているが…。果たして何が本命なのだろうか?大学院時代安藤先生から「モノ(古美術品)が欲しければ自分で買って本物が贋物か自分の眼で確かめろ!!」が教えた。ソバ猪口の購入が最初であった。それが、酒を嗜むようになってからは酒の猪口に変わり、著名な作家の作品とか新人の作品とかかなりの数に達している。染付け、青磁など各種あり、楽しんで使っている。また絵画については、隣りの家がハーンの3男洋画家小泉 清の家で、小学校の同級生では、日本美術院同人になった小谷津雅美が友人で、拙宅へは、南画家の横内大明さん、洋画家の峯村リツ子さんなどが良く遊びにきていた。

そんな環境から、絵を観ることも好きになり、美術館以外ではデパートの画廊へは良く行った。先述した通り大学院が芸術学専攻でもあったので、中国・日本の古画や佛像にも親しく接することも出来、京都・奈良へ出掛ければ、良い物・本物に接することもあって自然と趣味が嵩じて多くの作家のみなさんとの交流もあった。また毎年夏、早大の同窓仲間、ユーゴ協会の仲間、あるいは野外研のみなさんたちと中国行の視察研究旅行を日中旅行社にアレンジしてもらい、私がリーダー格で定年後15年間ほど実施できたことも大きな収穫であった。

## 2. 私の仕事内容

文化財保護委員会へ入省して以来、勤務が東京→奈良→千葉→東京へと移り変っていった。この間多くの芸術家・作家・建築家・研究者との出会いから自分自身の目を養って来たようである。奈良では、古美術写真の飛鳥園小川晴暁・光三親子の作品にじかに接し、撮影の現場・自宅の仕事場・隣りが日吉館なので多くの著名人が飛鳥園へ顔を出しており、そのよう

な方たちとの交流も得て古美術について多くのことを学ばせていただいた。奈良へ着任した時、住むところがなく奈良国立博物館の敷地内にあった奈良博の宿泊施設に、横田拓実・鬼頭清明・高島忠平・佐藤興治さんなどと共同生活のかたちで1年間住んでいた。そのお蔭で歴史・考古・美術環境がすこぶる良く、奈良市内で行われている行事(大寺院の行事も含めて)を1年間通して学ぶことも出来、これは奈文研に勤務する者にとって大いなる勉強にもなった。仕事の中心は平城宮跡の発掘が中心であったが、周辺の県・市への応援協力で、京都・大阪・三重・和歌山・奈良市内への発掘参加もあり、自身の考古学研究の助けと目のコヤシには相当のものであったろうと感じている。奈良に8年、千葉に10年、この千葉時代が新設館の博物館・美術館造りで、風土記の丘の整備も加わり、上総博・市川博・県立美術館の建設に参画した。

展示品の製作・購入・評価等々、建物そのものの環境整備、使い勝手、建築材の研究、設計者、現場監督者とは真の戦いであった。特に美術品の購入は高額な金子を伴う関係から確かな目ききが必要であった。美術館の時には、浅井忠作品を集中的に収集する目的から、京都をはじめ、各地のコレクター廻りを何回も行き、1000点以上の作品に接する機会を持つことが出来た。

## 3. 私が交流した芸術家たち

机上の学問も大事ではあるが、人との交流はもっと重要で、人間を豊かにさせてくれる。日本に「人間国宝」という制度が存在しているが、これこそ日本人のすばらしさを生かす重要な選択である。「人間重要文化財」を増設して、若い優秀な芸術家・作家・職人を養成する時代に入ったと考えているがいかがなものだろうか。

先きにも小泉 清のことは記したが、子供の時から絵の世界へ引き込ませてくれた大先生であり、となりのオジちゃんでもあった。小谷津雅美さんとは、大人になってからも友情は続き院展の春と秋の展覧会へは欠かさず出掛けていた。毎回勝手に批評を書かせていただいてもいた。雅美さんがなかなか同人になれないので(生活上柔道の先生もやっていた)、クラス会の時、『二兎を追うものは一兎も得ず』の格言を「オレを殴ってもいいから柔道をやめ絵に専念しろ!!」と伝えたところ、彼はすぐに柔道をやめ、絵に専念しその年の春季展で文部大臣賞をとり、一躍時の人となった。友人としてこんなに嬉しいことはなかった。秋

の院展で大賞をとり、同人に推挙され一流画家の仲間入りを果たした。三越本店での「小谷津雅美展」は大変好評であって、全国的にも地位を確立した。多くのすばらしい作品

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

を描き続けていたが、早逝したのが悔まれる。わが家に「富士山」のすばらしい美しい作品が残されている。2月23日は「富士山の日」大事にしたい作品である。

奈文研時代では、京都在住のパンリアルのリーダー日本画家の下村良之介さんと京都で良く飲ませていただいた。それは、インドボンベイの日本山妙法寺での共同生活が始まりであった。下村さんは考古学が好きで、ボンベイでは一緒に周辺の遺跡めぐりをした。帰国後、私が奈文研へ就職した関係で京都へ良く行くようになり、下村さんが京大の水野先生とも親しく周囲はすばらしい知識人ばかりで、勝手に親しくさせていただいていた。先斗町での下村さんの行きつけの美人

姉妹の居る酒場へは何回か連れていってもらった。その席に陶芸家の名人八木一夫さんがいつも居た。八木さんは、やおらポケットからイグサで作ったヒモを取り出し、「これ1本さえあればどんな焼きものでも作れる」と申された言葉は今も忘れることはできない。超一流作家というものはそういうものであろう。下村さんはいつもボヤイていた。「娘たちが私の絵をみると、お父さんの描く鳥はみんな死んでいる」と。一流作家になると発言も面白いし、一般人にはわからないすばらしい何かを持っている。彼等の環境と居場所、考え方、作品への集中力この中味を私に教えてくれた。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## リレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 120

#### 石川条里遺跡 ～長野県長野市～

白居 直之

長野自動車道を松本から長野方面へ車を走らせ、筑北からのトンネルを過ぎると善光寺平が一望できる姨捨サービスエリアに至る。「田毎の月」の棚田で有名な姨捨から北東に目を向けると千曲川の蛇行とその周辺の街並み、水田と盆地に迫りくる丘陵にクニ(国)の広がりを感じることができる。姨捨から数キロ走行し、盆地が開ける最後の長谷トンネルを抜けると善光寺平西に位置する長野市篠ノ井を通過する。このトンネル出口から高速道路に沿って長野市東側を山麓に沿うように約20kmわたり遺跡群が途切れることなく存在する。長野道及び上信越道建設に伴う発掘調査が1988年(昭和63年)から本格的に始まり、県内では今までに経験したことのない大規模な沖積地、自然堤防上の調査となり、何層もの堆積層に埋もれた文化層をもつ遺跡群に遭遇することとなった。その最初の遺跡が千曲川左岸の後背湿地に立地する石川条里遺跡でした。

石川条里遺跡は長野市教育委員会が1982年(昭和57年)から圃場整備事業に伴う記録保存を目的として発掘調査を実施したのをはじめとし、今日まで断続的に調査が実施され大きな成果をえている。「地籍は長野市篠ノ井石川」ですが「条里」という遺跡名称は地表面の条里地割りに因んだものであり、発掘調査でも平安時代前期(9世紀)の千曲川の洪水によって埋没した条里地割の存在を確認している。中央自動車道長野線工事に伴う調査は1988年(昭和63)から1991年(平成3)にわたって長野県埋蔵文化財センターによって行われ、1997年(平成9)に報告書が刊行された。



▲鳥形木製品



▲石川条里遺跡の祭祀遺構(古墳前期)

[長野県埋蔵文化財センター1989 長野県埋蔵文化財センター年報6]より引用

善光寺平南西域は、農耕生産域となる広大な沖積地と北陸地域を結ぶ交通の要所として弥生時代から古墳時代にかけて信濃の中核的な位置を占め、古代、中世に引き継がれる地域である。この地域で調査された遺跡の内容は居住域・墓域の規模、出土遺物の特異性など県内でも群を抜き、本遺跡には当該期の政治・社会的な基盤となる集落域・生産域が想定されていた。隣接する鶴前遺跡の山麓域から千曲川自然堤防に向かって調査が進むにつれ単純な低地ではなく、小微高地がいくつか検出され、遺構の検出時期に断絶があることが確認された。ことに東西調査域中央部に比較的広範囲に広がる小微高地が存在し、縄文時代、古墳時代前期、中世の3時期を中心とした遺構が検出された。低地では地表面下4mに及ぶ土壌から弥生時代中期に遡る水田址の痕跡と遺物が出土した。この石川条里遺跡(高速道地点)で注目すべきは、古墳時代前期の特殊祭祀遺構と弥生後期～古墳前期に帰属する水田址と多量の木製品である。

古墳時代前期の遺構は、幅10～13mの大溝、溝に囲われた中から検出された大量の土器・炭化物・焼土を含む200基をこえる土坑群によって構成された祭祀場であり、溝及び土坑群からは石釧・車輪石・銅鏡・銅鏃・各種玉類など大型古墳に埋納される遺物が出土した。調査当時の担当は隣接する水田域でしたが、状況を見に行くと、土坑から出土する土器がともかく多量で、小型丸底、小型器台、屈折脚の高杯という器種が多いことにも驚かされました。遺跡整理で土器を担当したとき、在地の「赤い土器」(箱清水式土器)に執着していた私は、善光寺平が畿内型祭式に圧倒された結末だと感傷に浸ったこともありましたが、それでも、石釧、車輪石を身近に手にすることができた感動も忘れません。また、溝内から出土するナスビ型の木製農耕具(掘削具)が大型であること、乾燥のために薄くなっているものの大型板材がまとまって廃棄されていること、縁辺に杭列が検出されたことなどにこの遺構がただならぬものであることが予見されました。古墳時代の豪族居館が各地で話題になっていた当時、私はそれに近い建物址をイメージしていました。

遺跡周辺には川柳將軍塚をはじめ首長クラスの古墳が点在し、この特殊遺構については豪族居館、農耕祭祀、首長継承祭祀(葬送儀礼)などの痕跡と推測され、その状況からは首長が関わる祭祀場であることは容易に判断されました。今では「地域首長と集落の人々による葬送儀礼がおこなわれ、その終末の廃棄、遺棄行為の遺構だ」という解釈が最もすっきりする気がしますが、古墳時代前期の石川型祭祀と言うべき類例のない発見でした。

低地に広がる水田はイネ化石の分析から弥生時代中期に遡る水田址の存在が確認され、弥生時代の水田区画がどのような形状であったか期待されるどころでしたが、断片的な区画を知ることしかできませんでした。調査区法面の層位からは捉えられていた畦畔も、重機と手作業による平面精査で起伏の連続性を確認することへの難しさを痛感し、この経験は同市内の川田条里遺跡に引き継がれることになりました。小畦

畔は明確ではなかったものの、杭材と木材を芯材とする恒常的な畦畔と200mに及び水路が検出されました。幅約3m前後の水路は埋没、改修されながら弥生後期から古墳前期に継続的に利用され、多量の木製品が出土しました。この木製品の出土によって県内で初めて保存処理施設が整い、個人的には木製品研究の発端となりました。木製品は農具200点余りと、呪符木簡、齋申などの祭祀具、武具、建築部材、用途不明の木材を含め800点余りに及び、遺物の機種分類、用途や名称を考える日々でした。木製品に関しては全国各地で出土例が増えつつあった頃で、多くの研究者が集い研究が深まった時期でもありました。数ある出土品の中でとりわけ興味を惹いたのは胴部と翼部を栓でとめた鳥形木製品でした。

高速道を利用するとき、本遺跡上を通過する十数秒間、古墳時代の祭祀と耕作のイメージを思い浮かべます。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは青木一男さんです。

## 考古学者の書棚

### 「中世都市研究18 中世都市から城下町へ」

中世都市研究会編／代表：五味文彦、小野正敏、玉井哲雄／山川出版社(2013)——伊藤 創

本書の最大の魅力は、中世都市の多様な魅力をわかりやすく提示した上で、それらが画一性の高い近世城下町へと変遷していく過程を、全国屈指の中近世研究者が、考古学的及び歴史地理学的視点で論じている点にある。

本書は、2012年に開催された、中世都市研究会2012大阪大会「中世都市から城下町へ」の研究発表を基に、新たに原稿が執筆されたものであり、主な内容は下記の通りである。

#### 第一部◎中世都市から城下町へ

城下町—中世都市から天下統一の拠点へ—

二木 宏

東アジアのなかの城下町

玉井 哲雄

城郭・城下町と都市のネットワーク

中西 裕樹

摂津・播磨国における城・城下町と町・村

山上 雅弘

上町台地の中世都市から大坂城下町へ

大澤 研一

阿波勝瑞—城下町の立地と景観—

山村 亜希

若狭小浜—守護所から近世城下町へ—

下仲 隆浩

下野佐野—清水城・唐沢山城から佐野城の時代へ—

出居 博

#### 第二部◎全体討論「中世都市から城下町へ」

#### 第三部◎都市・城郭研究の最新動向

2012.4～2013.3

本書は、全体を通じて「領国内において、港町、宗教都市、城下町が並列関係にあった。」「城下町は中世都市の一類型」であったという視点が貫かれている。それが近世へと移り変わるにつれ、城下町の存在性・卓越性が高まり、やがて政治的・経済的に一極集中的な機能を有する近世城下町が成立したと説明している。私にとってとりわけ魅力的で、目が開かれる思

いがしたのは、本書の随所で強調されている中世の町の多様性である。

本書では、畿内において山城を拠点に都市間ネットワークを掌握し、阿波においては地形的制約の著しい勝瑞館を拠点に一水運ラインを掌握した三好氏、惣構の城郭を整備し直接的な都市支配を目指した摂津の荒木氏、播磨守護赤松氏ほか有力豪族の拠点城郭を上回る豊かな遺物出土を誇る兵庫津、宗教領主が卓越した地域で、寺社を移転し城下町の建設を断行した豊臣政権、既存の湊町を大きく改変することなく近世城下町を成立させた若狭小浜、伝統的な拠点を放棄し、新たな城下町を成立させた下野の佐野氏などの事例が紹介されており、各地域の特性に則った、多様な支配のあり様や都市の姿が具体的に描かれている。

私の住む町は、開発があまり進んでおらず、文化財・観光業界でも必ずしもメジャーな場所ではない。この町の歴史的な個性やアイデンティティは何なのか、私はずっと思い悩んでいた。しかし、本書で描かれている多様な都市のあり様を評価する視点は、私の住む町のような場所でこそ、より生きてくるとはならないか。なぜなら、開発が進んでいないということは、中世以来の面影を残す古い町割りなどが良く残っている可能性があるということであり、これを本書の視点で研究するならば、この地域特有の中世の町や集落の姿を引き出すことができるかもしれないからである。中世都市の多様性を重視した視点で改めて自分の町の歴史を見直すなら、新たな魅力の発見につながるはずだ。本書は私を、魅力的かつ新たな研究分野へ誘うきっかけを与えてくれた本なのである。

#### アルカ通信 No.127

発行日 2014年4月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp